6. 書　評

「持続可能な資本主義」

著者：新井 和宏
出版：ディスカバー
発行：2017年 3 月25日



日経平均株価がバブル崩壊後の高値を更新し、大手企業を中心に企業の業績は好調な様子である。しかし、消費者の暮らしに豊かさは感じられない。また、大手製鉄会社の品質データ改ざん、大手自動車メーカの不正検査問題、大手家電メーカの不正会計など大手企業が社会や消費者を裏切る問題が後を絶たない。現代の資本主義経済と人々の暮らしは異次元ともいえる隔たりが感じられる。

『結い2101』は鎌倉投信の投資信託である。鎌倉投信が投資判断をするのは「いい会社」のみ、「いい会社」とは「これからの社会に必要とされる会社」、「経済性と社会性を両立している会社」を指し、期間も短期ではなく長期の投資である。その鎌倉投信創業者が「持続可能な資本主義」の著者である新井　和宏氏である。日本を代表する信託銀行、外資系ファンドに勤務した後に鎌倉投信を立ち上げたきっかけは、「リターン＝お金」というゴールなき競争を強いられる中で自身が体を壊されたことと、法政大学の坂本光司先生の著書の「日本でいちばん大切にしたい会社」との出会いだそうだ。

2008年11月に生まれた鎌倉投信は「リターン」を「資産の形成×社会の形成×心の形成＝幸せ」と提議し、過度にお金のリターンを求めず「いい会社」への投資を通じて社会の役に立ち、「いい会社」が成長して社会が豊かになれば受益者の心も豊かになることを目指した「結い2101」という投資信託商品を発売した。その投資信託商品を通じて、誰かの犠牲で成り立つ効率至上主義の代案として、近江商人の「三方よし」から時代に合わせた「八方よし」を提唱している。企業は事業活動を通して経済性と社会性を両立し、事業活動そのもので社会貢献を果たしており、そのためには、企業がステークホルダーとしての八方（社員、取引先・債権者、株主、顧客、地域、社会、国、経営者）との共通価値を創造することが求められ、それを実践している企業を「いい会社」として、「結い2101」が応援しているのである。短期的な利益至上主義の経営ではなく、長期的な資産形成を重視する企業を集めるとともに、それに共感する投資家をマッチングさせているのである。著書の中でも著者自身が現場を訪ねて評価した、八方よしを実現する企業が紹介されている。

現代の資本主義経済の中で高度に発達した金融工学の問題を切り崩す挑戦がこの本には書かれている。挑戦といっても非常に穏やかな正義感あふれる挑戦である

起業教育研究会　企画委員
京都府立木津高等学校　教諭　貴島良介